



第19回

死についての無意識の恐れ
日本のビジネスマン、そして上海

「最」期は病院に行くのが、日本じゃ普通だよ。60代の男性、Aさんと話していて、こんな言葉が出てきました。現役時代は“仕事人間”と呼ばれ、医療や介護に関する知識や情報も豊かなAさんの正直な言葉を聞けるチャンスです。理由を聞いてみました。

「最期まで家にいられるなら、いたいに決まってるよ。だけど、家で急に死ぬと異常死や事件扱いで、警察が来て検死になって大変なんだろう？ 在宅ケアとかなんとか言われても、整っていればいいけど、どこでもあるわけじゃない。在宅ケアが整っているところはあまりないから、いよいよよとなったら、病院に行くんだよ」

さらに重ねて聞きます。「それで病院に行ったら、どうなるの？」Aさんは、悲観的な表情で「それは、救命処置をされて、呼吸器や胃ろうが付いて、人工的に何年も永らえるんだよ。そういう人はあちこちの病院にたくさんいるよ、今でも……」。

「え、本人は、そういう状態を希望しているの？」とさらに突っ込む私に、Aさんは「それは望んでないかもしれないけどさ……今の日本では仕方ないことだよ」。

“恐ろしい問題は専門家に任せるのが得策”というわけです。携帯やパソコンが壊れたら、サービスショップで直してもらおう。社会問題なら、その道のプロに何とかしてもらおう。老いや死も同じように、素人の自分では無理なので、専門家に任せたい。ちょっと逃げたい気分も見え隠れします。

こういう考え方は、Aさんだけなのでしょうが？やはり同じ年代でビジネスの世界で活躍してきたBさんに聞いてみると「Aさんの考えはよく分かる。僕たちの仲間はだいたい、最期は病院と思っているよ」。やはり、共通する感覚のようです。

同じような話を、2019年の4月に上海の養老院（自費の老人ホーム）を見学した折に、聞きました。そこは、きれいな室内、美味しい食事、ゲームや歌やダンス、楽しいレクリエーションなど至れり尽くせり。スタッフにとってもやりがいのある職場です。

そこで「最期までここで過ごせますか？」と尋ねたところ、迷いもなく「最期は病院ですよ」という答えが返ってきてちょっと驚きました。中国の人にとって養老院は元気で活動できるうちに住むところで、食べられなくなったら、躊躇なく病院へ。死という言葉は縁起が悪い、口にするとさえたためらうそうです。

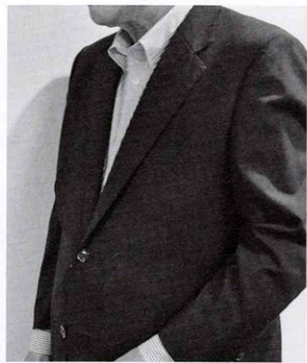
よく考えると日本でも、一部の有料老人ホームなどで「弱ってきたら出てください」というところはありますね。死についての恐れ、できれば考えたくないという感覚は、上海でも日本でも同じようです。

*

さてBさんですが、近頃は「最期は病院だけでもないな」と考えが変わったそうです。なぜかという、自宅での一人暮らしになった90代の母親の老いにつきあって、地域包括支援センターのケアマネジャーを頼りに独居をサポートし、心不全で救急入院騒ぎ、独居が難しくなって施設を探し、特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護やグループホームに落ち着き……という修羅場をくぐった経験から「いろいろな場やサービスがあると分かったから」。

いくら怖くても見たくなくても、死はすべての人に訪れます。この事実を認めるには、無意識の恐れを越える勇気が必要なのだと、改めて気付きました。

むらかみきみこ◎ターミナルケア・医療安全・在宅ケアのテーマで、国内各地、海外10か国を継続取材。主な著書に『患者の目線—医療関係者が患者・家族になってわかったこと』（医学書院）、『納得の老後—日欧在宅ケア探訪』（岩波新書）。



ビジネスマンの胸の内「最期は病院に行くのが普通。それだけでもないかな……」